



Title	「です」の分類 Elsewhere formとしての丁寧語
Author(s)	山田, 彬堯
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 59-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91466
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「です」の分類*
Elsewhere form としての丁寧語

山田彬堯

1. はじめに

丁寧語研究において、2010年代は、理論的言語学の枠組みにおける研究が大きく進展した重要な潮目として位置づけられる(Miyagawa 2012, 2017; Portner et al. 2019)。丁寧語という聞き手目当ての文法化された表現は、行為遂行仮説(Performative Hypothesis)で主張されているところの聞き手に関する投射を具現化する言語要素として捉えられ、文の周辺部の構造を理解するための重要な手掛かりとなるものとして議論の対象となってきた。

この理論化の中で日本語が果たしている役割は大きい。第一に、韓国語やタイ語といった他の言語とは異なり、日本語の「ます」は、(1)に示すように(助)動詞句のすぐ後に接続することが知られており、生起位置が予想される場所よりもはるかに低い(Miyagawa 1987, 2012, 2017, 2022; Yamada 2017, 2019b, 2023)。聞き手目当ての表現でありながら、文の周辺部に来ないこの「ます」の統語的位置やその認可のあり方について研究が積み重なることで、発話行為に関わる投射とそこから外れた位置に来る言語要素との関係への理解が深まりつつある。

- (1) a. [CP [TP [VP 認め] まし た] か ね]。
b. [CP [TP [AuxP 認め られ かけ て い] まし た] か ね]。

第二に、「です」については、「私は学生です」のような、「である」の丁寧語形式であるという(分かりやすい)コピュラ用法以外にも様々な場所での使用が確認されている。その分布の統一的な説明の難しさから、「です」が文中のどこに生起しどのように認可されているのかという問題が、日本語の丁寧語研究の重要なトピックとなりつつある(Yamada 2022a,b, 2023)。そこで、本稿ではこの「です」の問題について先行研究でバラバラに指

* 本研究は2022-2027年度基盤研究(C)「コーパス言語学と実験言語学の統合：敬語の確率的構文交替を事例に(代表:山田彬堯)」(#22K00507)、および2021-2026年、研究拠点形成事業(先端拠点形成型)「自然言語の構造と獲得メカニズムの理解に向けた研究拠点形成(代表:宮本陽一)」(#JPJSCCA20210001)の助成を受けた研究成果の一部である。

3. (バリエーション2) 丁寧形のコンコード用法

この2節で取り上げた「です」と全く異なる用法に、コンコードの「です」とここで名付きたい「です」がある。(8)a が示すのがその例である。この文の述語は動詞であり、名詞や形容詞述語文とは異なり、コンピュータは元来不要であるにもかかわらず「です」が生起する点が注目になる。(8)b が示すように、普通形である「である」や「だ」が、同じ位置に生起できないことから、この「です」が上記のコンピュータ用法とは異なることが確認できる。

- (8) a. 走りませんでした。
b. *走りませんであった(だった)。

Yamada (2019b)では、このような「です」は「ませ」とのコンコードとして出現するのだという見方が提案されている。この根拠として挙げられているのは、この(8)a の文に敬意上昇効果が見られないことである。(9)b が示すように丁寧語が同一文の中で複数回登場すると敬意が上昇することが知られている(Yamada 2019b: Ch 5)。しかし、(8)a では、丁寧形の複数使用にもかかわらず、その敬意は(2)b や(9)a と同程度であり、このことから、この「です」は意味的な貢献を持たないのだと考えられる。その意味で、*la casa blanca* (スペイン語「白い家」)に見られるような、ある形態的(非意味的)な素性が複数の位置にマークされるコンコード現象に比して論じられている。

- (9) a. [花瓶を壊してしまった]ことを お詫び申し上げます。
b. [花瓶を壊してしまい まし た]ことを お詫び申し上げます。(敬意: (9)a < (9)b)

さらに、このコンコードの「です」は (7)に見るように、テ形への埋め込みに関してもコンピュータの「です」とは性質が異なり、これらの特徴をまとめると(11)のような一般化が得られる。

- (10) *私は、[走りませんでし]て、学校に遅刻しました。
(11) a. 「だ」で置き換えることはできない
b. 動詞述語の文に登場する
c. 「テ形」に埋め込めない
d. 過去形と共起するとき「です」<「た」の語順を取る
e. 意味的に解釈できない

4. (バリエント3) 節周辺の「です」

上記の「です」のどちらとも異なる用法に、節周辺部 (Clause Periphery) に登場する「です」がある。これが最も明確に分かるのが、否定丁寧形である。(12)に示すように、現代日本語では、二つの否定丁寧形が可能であり(川口 2014; Yamada 2019a, 2022a, 2023)、両者は同一話者の中でもその使用が確率的に交替する。

- (12) a. [[TP[NegP 走り ませ ん] でし た] ね]。
b. [[TP[NegP 走ら なかつ] た] です ね]。

この(12)b の「です」は、コピュラの「です」とは異なり、「だ」で置き換えることもできず、また、「テ形」に埋め込むこともできない。これは、(13)に示す通りである。この点はコンコードの「です」と類似していると言える。Miyagawa (2022: 56)は、(14)a のように過去形の後ろの「です」が他の「です」と共起が可能なことから、これも(認識的)モダリティが生起する位置に登場するコンコード要素だ、という考え方を提案している。

- (13) a. *[走らなかつた] だ ね。
b. *私は、[走らなかつたでし]て、学校に遅刻しました。
(14) a. [[TP 荷物は 届き ませ ん {でし/*だつ} た] {でし よう/*だろ う}] か？
b. [[TP 荷物は 届い た] {でし よう/だろ う}] か？

ただし、節周辺部の「です」は、(12)b や(14)b のように、コンコードを伴わないものがあるので(cf., ??走りませんでしたですね)、すべての節周辺部の「です」がこの位置にあるかという点については更なる検証が必要であり、少なくとも(12)b や(14)b のような事例に関しては、コンコードの「です」とは異なり、文の中では丁寧語が一度しか発音されないことから、丁寧形の意味解釈を担っているのはこの「です」であると考えざるを得ない。また、(8)と(12)b では、過去を表す形態素「た」との語順が入れ替わっている点も統語的な位置を議論する際に大変重要である。

さらに、コピュラの「です」が名詞あるいはナ形容詞述語文のみに、また、コンコードの「です」が動詞述語文のみに使用が限定されていたのに対し、節周辺部の「です」は、(12)b のような動詞述語文に加え、(15)に示す通り品詞に関わりなく使用することが可能である点でもほかの用法と大きく性質を異にしている(小川他 2020; Yamada 2022a, 2023)。これらの点をまとめると、(16)のようにまとめることができる。

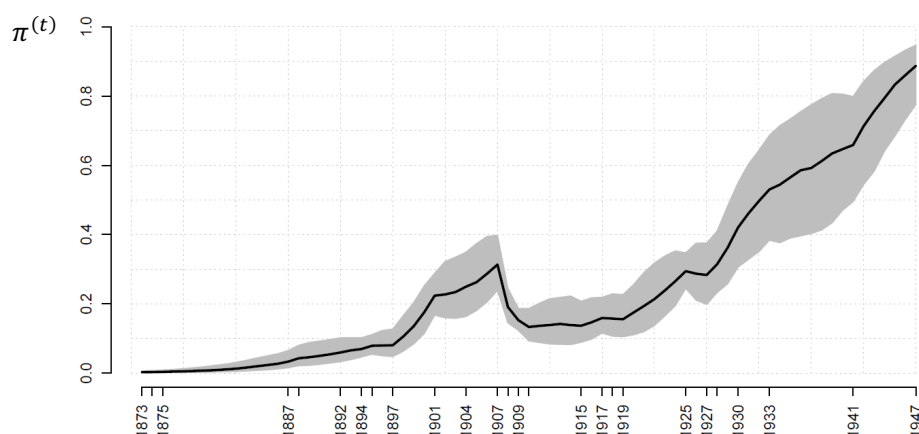


図 1 各年における $\pi(t)$ の事後分布．実線は事後中央値をつないだもの、灰色の領域は 99%ベイズ確信区間を表している。

- (15) a. 名詞：本当に異常気象だった です ね (<https://www.hatsune-kagu.com/president/page-71690/>)
 b. ナ形容詞：駄目だった です ね (<https://www.chunichi.co.jp/article/567232>)
 c. イ形容詞：寒い です ね
- (16) a. 「だ」で置き換えることはできない
 b. 述語の品詞に関わらず使用できる
 c. 「テ形」に埋め込めない
 d. 過去形と共起するとき「た」<「です」の語順を取る
 e. 意味的に解釈できる

このうちより詳述に値するのは、イ形容詞との共起についてである。イ形容詞は、コンピュータの「です」とも、コンコードの「です」とも用いることができないという点で丁寧形との相性が悪い品詞である。20 世紀から 21 世紀に出版された文法書や教科書を網羅的に調査した川口（2014）は、この節周辺部の「です」の使用が拡大する前までは、イ形容詞は、一度副詞に変換されてから「ございます」とともに用いる以外丁寧さを表現できなかったという点が指摘されている（例：「寒うございます」）。Yamada (2022a, 2023)では、この指摘を踏まえ、「副詞化されたイ形容詞＋ございます」と「イ形容詞＋です」を通時コーパスから抽出し、その中で「イ形容詞＋です」が取られる割合について、状態空間モデルを用いた時系列分析を施し、その使用傾向の分析を行っている。その推定結果（推定された事後分布）を表したものが、図 1 である。20 世紀初頭には稀であった節周辺部の「です」が 1920 年代頃から徐々に勢力を拡大し、1940 年代になると「副詞化されたイ形容詞＋ございます」を上回っていく様が見て取れる。

節周辺部の「です」が登場する前においても、「です」は聞き手目当ての表現であったことから、この新しい用法の登場は間主観化とは見なせない（間主観化は、間主観的ではない表現が間主観的な用法を帯びていくプロセスを指すからである）。また、文法化とも異なる現象である（文法化は、語彙的な要素が文法的な機能を獲得していくプロセスを指すからである）。しかし、聞き手目当ての間主観的な表現が節の周辺部で発音されるという一般的な傾向に迎合するかのように、言語体系が再編されていくことは、行為遂行仮説を強く支持するものであり、(17)に示されるようなタイ語などの丁寧語の統語的特徴との類似性が指摘できる。

(17) タイ語

<i>lian</i>	<i>yéε</i>	<i>løy</i>	<i>lǎ</i>	<i>khráp.</i>
study	problematic	PP	Q	AH.MASC

‘She studies so badly?’

さらに、タイ語（や韓国語）などとの重要な共通点に、その他の談話素性とのつながりが指摘できる（Yamada 2019, 2023, to appear）。例えば、(17)の丁寧語は聞き手への敬意だけでなく、話し手が男性なのか女性なのかであるという（日本語で言えば「楽しみだわ」「楽しみだぜ」のように終助詞が担う）情報も併せてエンコードされている。同様に、節周辺部の「です」も終助詞と強いつながりを持っていることが指摘できる。上記の Yamada (2022a, 2023)の統計解析の結果、節周辺部の「です」がその勢力を拡大していく際に、(18)a のような終助詞がない環境よりも、(18)b のような終助詞を伴う環境でその使用が後押しされてきた、という観察が報告されている。この点は、節の周辺部で聞き手目当ての要素がどのように表示されているのかを解明していくうえで、非常に重要な役割を果たしていくものと考えられる。

- (18) a. 寒い です。
 b. 寒い です ね。

5. （バリエント4）句の周辺部の「です」

「です」は節の周辺部だけではなく、句の周辺部にも生起することができる（Yamada 2022b）。この例を示したものが(19)b である。

- (19) a. あの 昨日 私は 駅に 行きました。
 b. あのですね 昨日ですね 私はですね 駅にですね 行きました。
 b. *私はでしたね 駅にでしたね 行きました。

この「です」は、上で見てきた三つの「です」とは異なり、下記のような特徴を持っている。

- (20) a. 「だ」で置き換えることは可能である
 b. 間投助詞がなければ使用できない
 c. 「テ形」に埋め込めない
 d. 過去形と共起できない
 e. 意味解釈への貢献はある

第一に、コンコードや節周辺の「です」とは異なり、「だ」と交替することは可能である。ただし、(21)に示すように、この「だ」は、コピュラの「だ」とは異なり、述定されるべき対象がなくとも用いることができ、フィラーなどにも附属することができる。さらに、使用に際しては横柄なニュアンスが出るという点でもコピュラの「だ」とは異なる。第二に、(22)に示すように、間投詞が存在しなければ、使用することができないという点も大きな特徴である。

- (21) あのだね 昨日だね 私はだね 駅にだね 行ったんだよ。
 (22) a. *私はです 駅にです 行きました。
 b. *私はだ 駅にだ 行ったよ。

第三に、この「です」は、埋め込み文に生起できる。(23)では、テ節の中に「駅に」という要素が埋め込まれていると考えられ、その周辺に「です」は生起できている。ただし、統語的な階層とは別にプロソディという音韻構造を考えると、(23)a とは異なり、(23)b では「駅にですね」が一つのユニットを形成し、「ね」の後ろに強制的に短いポーズが置かれ、「寄って(です)ね」とは音韻的には異なるフレージングを受けていることは特筆すべき点であろう(Yamada 2022b)。第四に、(24)に示すように、過去形と前後して用いることもできないことも指摘でき、この点は、今まで見てきたどの「です」とも異なる特徴と言えよう。

- (23) a. 私は [駅に 寄って] 帰ってきました。
 b. 私はですね [駅にですね 寄って]ですね 帰ってきました。

- (24) a. *私は {でし た／た です} ね 駅に {でし た／た です} ね 行きました。
 b. *私は だっ たね 駅に だっ た ね 行ったよ。

最後に、(9)b とは異なり、数回にわたる「です」の発音にもかかわらず、敬意上昇効果は持たないものの、(19)b の文は、(19)a と比較した場合、発音される度に、すなわち、間投助詞が解釈され、プロソディック・ユニットが形成される度に「私は聞き手である貴方への敬意を忘れていないですよ」というようなリマインドを促す効果が存在することから、その意味では意味解釈への貢献が存在すると言えるだろう (Yamada 2022b)。

6. (バリエント5) 応答文における「です」

「です」は、(25)に見るように応答文の末尾に登場することも可能である。この会話においては、前文には「です」ではなく「ます」が用いられているにもかかわらず、「彼は走りました」という意味の命題を置き換える意味で、「ですね」が使用されており、この応答文が省略を伴う文なのか、また、なぜ「です」が出現するのかについて、理論化が俟たれる。

(25) 話し手 A: 「彼は走り まし たよね？」

- 話し手 B: a. 「です ね」
 b. *「ます ね」

この応答文における「です」については、次のような特徴が指摘できる。第一に、「だね」のような応答文も可能であることから、「だ」との置き換えは可能である。この場合、句周辺部の「だ」とは異なり横柄なニュアンスは生じないことから、「だ」と「です」の交替に関してはコピュラの「です」と似ているとも言える。しかし、第二に、コピュラの「です」とは異なり、(25)では、(意図された) 文の述語が動詞文であり、他にも先行文が「リンゴでしたよね？」「寒冷でしたよね？」「寒かったですよね？」などであっても用いることができることから、述語の品詞には依存しないということになる。この点は、節周辺部の「です」と類似している。

- (26) a. 「だ」で置き換えることは可能である
 b. 述語の品詞に関わらず使用できる
 c. 「テ形」に埋め込めない
 d. 過去形と共起するとき「です」<「た」の語順を取る
 e. 意味解釈への貢献はある

第三に、テ形への埋め込みは(27)に示すように難しい。第四に、(28)に見られるように過去形との共起は可能で、その際には「です<た>」という語順を取る。第五に、この部分以外に丁寧の意味を担う形態素がないことから意味的な貢献を担っていると言える。よって、この用法は以上に挙げたどの用法とも異なる性質を持っていると考えるべきだろう。

(27) 話し手 A: 「彼は走り まし たよね？」

話し手 B: * 「でし て びっくりしました」

(28) 話し手 A: 「彼は走り まし たよね？」

話し手 B: 「でし たね」

7. まとめと今後の研究の展望

本稿では、意味／形態統語的な観点から五つの異なる「です」を同定した。これらの「です」には、「です」と発音されること以外に、統一的な共通点を見つけることが難しく、仮に一般化を導く場合には、(29)のように *elsewhere form* として「です」を定義する他ないだろう。

(29) 「ます」が出られない環境に丁寧形が求められる時には「です」が使用される

無標な形態ということであれば、それが図1に見たように、通時的にその生起環境を拡大させてきたことや、2 節から 6 節で見てきたように、数々の形態統語的に異なる位置に出てこられるという事実を説明することは可能である。ただし、それぞれの場所がいったいどこにあるのかと、そしてそれらがどのように(形態)統語的に結びつきあっているのか、という点も詳らかにされなければならないだろう。

参考文献

- 小川芳樹・石崎保明・青木博史 (2020) 『文法化・語彙化・構文化』 開拓社.
川口良 (2014) 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』 くろしお出版.
Miyagawa, Shigeru (1989) LF Affix raising in Japanese. *Linguistic Inquiry* 18, 362–367.
Miyagawa, Shigeru (2012) Agreements that occur mainly in the main clause. In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman, and Rachel Nye (eds.) *Main clause phenomena:*

- new horizons*, 79–112. Amsterdam: John Benjamins.
- Miyagawa, Shigeru (2017) *Agreement beyond phi*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Miyagawa, Shigeru (2022) *Syntax in the Treetops*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Portner, Paul, Miok Pak and Raffaella Zanuttini (2019) The speaker-addressee relation at the syntax-semantics interface. *Language* 95(1). 1–36
- Yamada, Akitaka (2017). The syntax-semantics interface of the addressee-honorific construction: the multidimensional in-situ analysis vs the copy analysis. Oral Presentation at Mid-Atlantic Colloquium of Studies in Meaning (MACSIM), Georgetown University 2017.
- Yamada, Akitaka (2019a) A quantitative approach to addressee-honorific markers: Identification of crucial independent variables and prototypes. *Keiryō Kokugogaku [Mathematical Linguistics]* 32 (2), 117–132.
- Yamada, Akitaka (2019b) *The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers*. Doctoral Thesis. Georgetown University.
- Yamada, Akitaka (2022a) I-keiyoosibun ni okeru teineigosiyoo no rekisiteki henka: zyootaikuukan moderu o motiita zikeiretu bunseki [The historical change in the use of addressee-honorific markers in a canonical adjective construction: a time series analysis using the State Space model]. *Sizengengo e no rironteki apurooti [A Theoretical Approach to Natural Languages]*, 42–51.
- Yamada, Akitaka (2022b) A Distributed Morphology approach to Japanese phrase-final particles. *Proceedings of NELS* 52, 255–264.
- Yamada, Akitaka (2023) Looking for default vocabulary insertion rules: Diachronic morphosyntax of the Japanese addressee-honorification system. *Glossa: a journal of general linguistics* 8(1), 1–47.
- Yamada, Akitaka (to appear) Honorificity. In Peter Ackema, Sabrina Bendjaballah, Eulàlia Bonet, and Antonio Fábregas (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Morphology*.